



全国棚田(千枚田)連絡協議会

# 棚田ライターズ

第68号 2015.1.20  
(年2回発行)

発行/全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集/ふるきやらネットワーク

Tel: 042-386-8355 東京都小金井市本町6-3チーム石塚内

TEL: 042-385-1180 / FAX: 042-385-1180

<http://www.yukidarama.or.jp/tanada/>

## 特集・第20回全国棚田サミット

第20回全国棚田サミット特集 特別寄稿: 佐藤謙  
三郎(農民作家)、青柳健一(写真家) やまがたの棚田  
大蔵村ほか



棚田現地見学会の小倉の  
棚田見学会にて。見学会は3つのコースに分かれ、うち2コースがこの小倉へ足を運んだ。写真撮影は(上)、棚田風景写真も): 芦田多恵さん(高知県構原町)

上山市小倉での見学会のようす。  
小倉の棚田は平成22年に約26haが整備され、不整形な田んぼと整備済みの棚田の両方が見られるところ。見学会のおもてなしは、おいしい玉こんにゃく。写真提供: 上山市



棚田現地見学会の日本の棚田百選コースでは、まず山辺町の大蔵棚田へ。杭掛けの風景が美しいところだが、片付けされた後で残念。保全活動等の説明を熱心に聞く参加者たち



同じく日本の棚田百選コースで、朝日町楓平(くぬぎだいら)へ。展望台となっている小高い丘(一本松公園)に上がりれば、棚田を一望でき、そこでおもてなしを受けた

# 第20回全国棚田(千枚田)サミット開催

2014年10月23～24日

テーマ：未来へつなごう実りの大地

## 未来へつなぐ思いを発信

山形県上山市長 横戸 長兵衛

全国各地より多くの方々にお越しいただき、東北では初開催となる「第20回全国棚田(千枚田)サミット」を盛会のうちに終了することができましたことに、厚く御礼を申しあげます。

各地の棚田には、その地域の歴史と文化が刻まれており、その美しい景観は日本の原風景として心のふるさとなつていることを、2日間にわたるサミットでの交流や議論を通し改めて実感するとともに、東日本大震災により被災した地域の皆様へ、元気が発信され、復興へ向けた後押しとなつたものと感じております。

国の農業政策におきましても、攻めの農業として、日本型直接支払制度の創設など、中山間地域における農業生産活動への支援が展開されております。

そういった意味からも、20年にわたり続いてきた本サミットが果たしてきた役割は非常に大きなものがあると考えております。棚田を保全し、将来世代に引き継いでいくことは、いまを生きる私たちに課せられた責務であり、今後とも、そうした機運がなお一層高まっていきますことを心よりご祈念申しあげあいさつといたします。



1日目:10月23日(木)

開催プログラム

2日目:10月24日(金)

- ・全国棚田(千枚田)連絡協議会総会
- ・オープニング
- ・第20回全国棚田(千枚田)サミット開会式
- ・基調講演「誰が棚田を守っていくのか?」  
～私の中山間地域報告～ 結城登美雄氏
- ・棚田現地見学会:山辺町大蕨～朝日町権平／上山市小倉～山形市蔵王温泉／上山市小倉～蔵王高原坊平
- ・交歓交流会

- ・棚田保存会意見交換会
- ・第1分科会「棚田を守る人づくり、組織づくり」
- ・第2分科会「農業を起点とした6次化、農商工連携による棚田地域の活性化」
- ・第3分科会「多様な交流による棚田地域の活性化」
- ・第4分科会「地域農業の継続を実現するための仕組みづくり」
- ・首長会議「山村地域と都市との交流」
- ・事例発表 県立上山明新館高校／山辺町グループ農夫の会
- ・分科会まとめ
- ・第20回全国棚田(千枚田)サミット閉会式

北は青森県、  
南は鹿児島県  
から  
総勢約900人が  
上山市に集まり  
ました!!

山形県上山市にて

### 2日目:事例発表

「食用ほおづき」から広がる笑顔の輪  
県立上山明新館高等学校 食料生産科



食用ほおづきの研究を進める女子高校生4人による発表。上山明新館高等学校は、全国の高校ではじめてJGAP(農業適正規範)農場の外部認証を得ている。

「大蕨棚田」の元気再生をめざして  
グループ農夫の会代表 稲村和子



山形県山辺町の大蕨棚田の再生物語が紹介された。サッカーリーグのモンテディオ山形の応援を受け、モンテ棚田米の生産や雪中棚田サッカーなど交流も深まっている。

### 1日目:基調講演

「誰が棚田を守っていくのか?」  
～私の中山間地域報告～

講師:民俗研究家 結城登美雄氏



山形県大江町出身の結城氏による、東北でのフィールドワークに基づいた講演。中山間地域の厳しい現実を、食べ物を作ってくれている人たちへの感謝とともに語り、「鳴子の米」など自身がプロデュースしたプロジェクトを紹介した。

# 山辺町大蕨・朝日町楓平

## 棚田に広がる まつすぐな畦

静岡県農地保全課農村整備班主事 土屋里実

大蕨の棚田。広さは全体で18haもあるそうです



展望台からの楓平の棚田の景色。この棚田を見に訪れる方も多いとのことです

棚田サミットに参加しました。1日目の棚田見学会は「日本の棚田百選」「コース」でした。特に新鮮に感じたのは、棚田に広がるまつすぐな畦です。棚田の畦といえればあるものを想像してい

たのですが、きれいに整理された畦が広々と続いている景色からもまた違った雰囲気が感じられました。「紹介いたいた工夫の盛り込まれた棚田保全活動も、興味深いところがたくさんあり勉強になりました。

そしてお迎えくださった地元のみなさんの雰囲気も、棚田の風景や活動紹介と同じくらい印象に残っています。どちらの棚田でも保全会のみなさんが私たち参加者においしい食べ物を用意してくださいたり、笑顔で声をかけてくださつたりと温かく迎えていただけて、ほっとした気分になることができました。この場をお借りして、改めてお礼申し上げたいと思います。

楓平の棚田。地元保全会のみなさんも、お前のままで迎えてくださいました



棚田を眺めながら、玉こんにゃくとシナノスイート（林檎）をいただきました

# 上山市小倉・山形市蔵王温泉

## 眼前に広がった 整備の行き届いた棚田

長崎県 長崎市農業振興課 天羽紀絵

待ちに待った現地見学会。前日の雨と、長崎から参加した私は寒すぎる山形の気温に心配していましたが、当日の天候は見事に晴れ。

小倉棚田の緩やかな坂道を歩くと、一枚一枚整備の行き届いた大きな棚田が眼前に広がり、隣接して果樹も栽培されており、長崎市の棚田とは一味違う風景に思わず何度もカメラのシャッターワークをしてしまいました。

頂上では、熱々の玉こんにゃくと、暖かい笑顔の地元の皆様の歓迎を受け、周邊のお花

街道、雪の積もる棚田など、四季を通していくいろ

るな風景を楽しめ、また訪れてみたくなりました。何より、地元の方の暖かいおもてなしに感激し、地域と共に存在する棚田の魅力を改めて実感し、同時に保全の重要性も再認識しました。

お見送りを受けながら、バスで数10分揺られて到着した藏王温泉街は、周りの川沿いからもくもくと温泉煙が上がり、共浴場には足湯もあり、温泉街を満喫できました。上山市の皆様、どうもありがとうございました。



玉こんにゃくでおもてなしを受けると……

笑顔の素敵な案山子君のお出迎え



玉こんにゃくでおもてなしを受けると……



思わず誰もが笑顔に

1枚が大きな小倉棚田

お見送りを受けながら、バスで数10分揺られて到着した藏王温泉街は、周りの川沿いからもくもくと温泉煙が上がり、共浴場には足湯もあり、温泉街を満喫できました。上山市の皆様、どうもありがとうございました。

# 上山市小倉・蔵王高原坊平

## 小倉の棚田を見学し 棚田サミット継続を思う

高知県 植原町産業振興課商工観光係長 花田多恵

サミット会場からバスに乗り、約15分で小倉の棚田に到着しました。この棚田は区画整理がされており長方形の広い田んぼが段々に並んでいます。以前は急峻で面積の小さな農地が多く、道路や用水路も未整備で耕作放棄地が点在しており雑草の繁茂や病害虫の発生などによる被害、扱い手農家の育成、農道・水路等の維持管理にも支障をきたすことから整備を行つたそうです。

休憩所ではお茶と玉こんにゃくでのおもてなしを受け、開催地のスタッフや事務局の方の「火力はもちろんですが、棚田を思う地元の方々の協力があるからこそ、棚田サミットが継続されているのだと思いました。

約30分の散策コースの途中で、第1回目から参加している女性に出会うことができました。「第1回開催地の高知県植原町から参加しています」と話すと大変喜んでいただき、少しの時間でしたが当時のエピソードなどを聞くことができました。

第1回開催地の高知県植原町から参加している女性に会うことができました。「第1回開催地の高知県植原町から参加しています」と話すと大変喜んでいただき、少しの時間でした。

採用3年目で、このような全国規模の大会は初めてでした。会場受付スタッフとして関わり、慣れ親しんでいる風景、千枚田の底力を実感しました。

今回第20回の節目となる棚田サミットに参加させて頂いたことに大変感謝しております。



## 鍵を握るのは「ミニケーション」

第1分科会コーディネーター

福與徳文



# 棚田を守る人づくり、組織づくり

1



第1分科会には次の2つのねらいがあつた。一つは、自然災害から地域を復興していく取り組みの中から棚田保全へのヒントを得ることで、もう一つは、地域外や他産業の力を導入して地域活性化につなげる方法を明らかにすることである。

宮城県の津波被災地では、震災を契機に離農者が増加し、担い手に農地を集積したり、當農組織を設立したりする必要があつた。「農業機械リース事業」が契機となつて當農組織の設立が進んだが、住居移転等によつて、もとの地域から離れ

震を契機に震災復興ボランティアが地域に入り、それが地域づくりボランティアに進化して、地域住民とボランティアが協働で集落存続活動を行つては、休校を活用した拠点づくりや、住民がおんティアと地域をつなぐ活動としては、ボランティアに農地管理を任せせる仕組み等に取り組んでいる。いまでは若者が移住して「限界集落」を脱した。

建設業から参入した農業法人(有)米作(山形県鶴岡市)は、耕作放棄地を42ha再生し、枝豆をペーストに加工したり、漢方生薬を試験栽培したりして增收につとめている。他産業からの農業参入には地域との関係が重要だが、加工部門への雇用や、漢方生薬栽培の技術指導等によって地域全体の活性化につなげていこうとしている。

これらの取り組みを見ても、何よりも人と人とのつながることが重要で、それはコミュニケーションが鍵を握ることがわかる。そしてその機会や場を設けることが「人づくり、組織づくり」の第一歩となる。

- コーディネーター：福與徳文(茨城大学農学部教授)
- パネラー：落合基継((一財)農村開発企画委員会主任研究員)  
山本浩史(NPO十日町市地域おこし実行委員会代表理事)  
郷古雅春(宮城大学食産業学部教授)  
金内広和(農業法人(有)米作専務取締役)

## 鍵は「兼業」!?

第2分科会コーディネーター 小玉順子

小玉順子



この分科会では、6次化や農商工連携による棚田地域の活性化を取り上げた。

棚田や中山間地域では、高齢化と担い手の確保が最大の課題である、その暮らしを継続させるための手立てをどうつくるのか、4人のパネラーの発言から2つの視点が見えてきた。

首都圏でおにぎりを販売する企業「おむすび 権兵衛」の外岡学氏は、「もつとたくさんお米を食べて欲しい」と市販品の1・5倍の大きさのおむすびを販売し、「お母さん代行業」の想いで家庭の食を助けたいと言う。その「おむすび 権兵衛」と米を取引している佐々木賢一氏からは、17年間続いている東京・町田市との山村留学の交流から農産物の交流へとつながった話。上野健夫氏は、山間地でこそ育つ米「ゆきむすび」で、作り手と食べ手の信頼関係を丁寧に築き2万4000円/俵を維持している。その活動に携わった学生が「おむすび 権兵衛」に就職し、ここでも人のつながりが米の物流につながっている。

また、上山集落棚田団で活動する20代の水柿大地氏からは、「みんなの孫プロジェクト」など外へ発信することで、移住者が増えているという嬉しい話が聞けた。彼自身も「人に魅せられ上山に愛着が湧いた」と言う。志の縁と外の力が地域を活性化している。

- コーディネーター：小玉順子(NPOおおさき地域創造研究会事務局長)
- パネラー：外岡 学(株)イワイ商品開発部長)  
佐々木賢一(東沢地区協働のまちづくり推進会議代表)  
上野健夫(NPO鳴子の米プロジェクト理事長)  
水柿大地(NPO英田上山棚田団)

参加者の顔がぱッと明るく反応するのを感じた。やはり地域には若い力が必要だ。

同時に地域内にある小さな仕事をながら外へ手を確保していく、その可能性でこの分科会は終了した。



2

# 農業を起点とした6次化、農商工連携による棚田地域の活性化

## 「棚田ツーリズム」の実現に

向けて 第3分科会コーディネーター 沼田洋一郎



### 3 多様な交流による棚田地域の活性化



○コーディネーター：沼田洋一郎(さんぽみち総合研究所(株)調査研究部長)

○パネラー：堂前助之新(白米千枚田愛耕会代表)

富士重人(かみのやま温泉旅館組合組合長)

小関信行(クアオルト研究室代表)

中島敏幸(四ヶ村棚田ほたる火コンサート実行委員会会長)

第3分科会は、棚田地域で交流事業に携わってきた農業者の代表と地元かみのやま温泉の観光交流産業の関係者をパネラーに招き、農業と観光が連携して棚田地域の活性化につなげる取組をテーマに討議が行われた。

平成23年の世界農業遺産認定を契機に大勢の観光客が訪れるようになった輪島市の白米千枚田では、レストランハウスでおにぎりが千個売れたり、棚田米を買ってくれたりと、これまで苦労に感じられた棚田の維持が今では楽しみや喜びに変わった。山形県大蔵村四ヶ村からは、ほたる火コンサートの開催によって肘折温泉に宿泊した客が棚田に足を運んでくれるようになり、自分たちの地域に誇りが

持てたようになつたとの報告があつた。これらの事例は、これまでの農業体験や交流事業が一步前進して、ツーリズムの段階に踏み出したといえるだろう。

全国有数の温泉地である上山市からは、歩くことで人も地域も元気になることを目指したクアオルトの取組が進められ、棚田を歩くことによって棚田景観の開放感や農業者との交流がもたらすメンタル面での効果が期待できること、また若い世代を中心に戸・旅館と観光農園が連携し、宿泊客の誘致に効果を上げていること等が報告された。

言うまでもなく、棚田の保全には多くの手を必要とする。手入れの行き届いた美しい棚田の景観は優れた観光資源であるばかりではなく、観光でい 「おもてなし」の表現にもつながる。観光で訪れた人に對し棚田を見てもううだけなく、棚田を維持してきた先人たちの歴史や文化を伝え、一人でも多くの賛同や共感を得ることがめぐり巡つて棚田保全の気運の醸成につながる。

今回幅広い分野の人々が一堂に会し、歩く観光の視点から棚田の価値を再認識し、「棚田ツーリズム」の実現に向け、相互理解を深める機会となつた分科会であつた。

そこで、米を生産するために不可欠な水を確保するために優れた水利システムを先人が構築し、現代の地域は生産者による保全活動だけでなく、子ども、非農家も参加してもらえるような活動をし、また消費者である都市住民によるボランティアを募つて、必死にそれを守つてること。関わる人は誰しもが感動し、命の水としての大切さを実感すること。そしてそれぞれの地域で保全活動の中核をなす次代の担い手育成にも取り組んでいることなどが紹介された。

一方で、いずれの地域も住民が減少し、高齢化が進み、後継者確保が難しくなつており、住民が負担する共益費は減少し、維持のための予算が減少していることが示された。さらに、関わらない人々の水利システ

ムへの理解不足がより強まつてゐることも語られた。

これらの議論から、関わる人々の理解だけでは棚田を維持するための地域農業が健全に継続されていかなければならず、特に棚田地域は地域が一体となって多くの知恵を出し合う工夫すなわち仕組みが必要である。それには情報の共有が必要不可欠である」と提起した。これに対しても4名のパネラーから、それぞれの関わる棚田・中山間地域の特徴、取り組みの紹介をいただいた。

そこでは、米を生産するために不可欠な水を確保するために優れた水利システムを今後の課題として提示し、終了した。



仕組みを 第4分科会コーディネーター 小沢 瓦

第4分科会コーディネーター 小沢 瓦

瓦

関わる人だけでなく幅広い負担で維持される



○コーディネーター：小沢 瓦(山形大学農学部教授)

○パネラー：木村剛仁(横川堰語り部)

大泉隆義(大江町土地改良区事務局長)

浅見彰宏(本木・早稻谷 堰と里山を守る会副会長)

平井貞夫(いがみ田を守る会会长)

# 労働負荷軽減に向けた技術改良と交流人口の「定着」化による農業後継者の確保を

コーディネーター 千賀裕太郎（棚田学会会長 東京農工大学名誉教授）



首長会議は、全国14の自治体の首長（本人出席7名）ならびに来賓として農林水産省農村振興局中山間整備推進室西浦博之室長及び中山間地域振興課吉野広郷課長補佐が出席して、「山村地域と都市との交流」をテーマに、活発な論議が行なわれた。また今回不参加の11自治体からも、取組事例や効果・課題等の報告文書の提出があった。

まず、各参加自治体より都市との交流の取組事例の紹介があった。棚田オーナー制度、大学生援農サークル活動、キヤンドル祭り、大地の芸術祭、温泉クアオルト健康ウォーキング、縁側カフェ、恋人の聖地指定、森林づくりボランティア、特産加工品づくり、田舎体験事業など、多彩な取組みが紹介され、とりわけ近年における若い世代の着実な棚田地域への接近の全国的傾向には、大いに勇気付けられた。

他方で、棚田地域の担い手の高齢化は依然進行しており、労働負荷軽減に向けた技術改良の推進と

交流人口の「定着」化による農業後継者の確保が、喫緊の課題であることが改めて確認された。こうした課題の解決に向けて、食糧に加えて再生エネルギーの生産、木材の活用による多様な産業振興、地域における6次産業化の推進、子どもをターゲットとした教育・文化事業、海外需要を喚起する棚田ツーリズムのレベルアップなど、創意あふれる内発的な経済振興策の展開にむけ、地元の住民と参入しつつある若い人材が協力してこれを担えるような条件の構築が、いま強く望まれることを確認した。

こうした議論をふまえ、首長会議として「提言書」を作成に向けた検討項目は次の通りである。

1、棚田地域における交流・活性化状況等の情報発信の活発化策の検討  
2、棚田地域における営農技術改良等による労働負荷の軽減対策の検討  
3、本協議会会員の意見集約・情報発信の活性化に向けた会議等のあり方の検討  
4、東北地方など本協議会会員自治体が少ない地域における会員拡大方策の検討  
5、「提言書」の提出先の拡充とその後のフォローアップのあり方の検討

意見交換会は、全国からサミットに参加する保存会が全体交流会の挨拶程度の交流で終わるのは物足りないという思いから、もう少し掘り下げる意見の交換ができるないかという考え方から、昨年度の試験的試みを経て本年度より本格的に始まったものである。本年度は、東日本を中心にして北は山形県大蔵村四ヶ村協議会、南は長崎市大中尾棚田保存組合など18団体の代表と都府県住民を代表してNPO法人棚田ネットワークの理事4名が加わり開かれた。

交換会は、①棚田地域で農業（保全活動）を継続していくために、②棚田資源を生かした産業の振興についてというテーマを設定、4班に分かれワークショップ方式により、山形県庁の地域づくりプランナーが進行役を務めますめられた。

その結果は、班ごとに、「標語」と（そ

のこころ）としてまとめられた。  
△1班▽「棚田は知恵の集大成、守り続けるのは今でしょう」（棚田には農業の技や歴史、農村の伝統文化など暮らしの知恵がぎっしり詰め込まれており、その知恵を守り続けるためにも棚田の保全活動をさらに拡げる必要がある）。

△2班▽「○○さん あなたのふる里、

有形無形の資源—歴史・文化・湧水動植物・景観—を知つて生業や生活に活かし、棚田地域に住み続け、子供には夢、お年寄りには生き甲斐を与えることが必要）。  
△3班▽「棚田を活かす」（棚田を取り巻く

△4班▽「さあやろう 百年の努力無駄にせず」（棚田の価値—美味しい米、美しい景観、継続してきた伝統文化—を全ての人に認識してもらい、棚田を守る意識づけとお米などの付加価値を高めることが大切）などの成果がえられた。

さらに、これらの議論を踏まえて、地

# 4班に分かれてワークシヨツプ方式で議論

コーディネーター 中島峰広（NPO棚田ネットワーク代表 早稲田大学名誉教授）



意見交換会は、全国からサミットに参加する保存会が全体交流会の挨拶程度の交流で終わるのは物足りないという思いから、もう少し掘り下げる意見の交換ができるないかという考え方から、昨年度の試験的試みを経て本年度より本格的に始まったものである。本年度は、東日本を中心にして北は山形県大蔵村四ヶ村協議会、南は長崎市大中尾棚田保存組合など18団体の代表と都府県住民を代表してNPO法人棚田ネットワークの理事4名が加わり開かれた。

交換会は、①棚田地域で農業（保全活動）を継続していくために、②棚田資源を生かした産業の振興についてというテーマを設定、4班に分かれワークシヨツプ方式により、山形県庁の地域づくりプランナーが進行役を務めますめられた。

その結果は、班ごとに、「標語」と（そのこころ）としてまとめられた。

最後に交換会についての印象と評価を述べれば、最初は緊張しているのか静かで硬い雰囲気であったが、会が進むにつれて和やかな雰囲気になり、活発な議論が展開されるようになつた。同時に参加者が棚田保全について真剣に考え、取り組みの主体者になる覚悟が示され、頼もしく感じられた。これらのことから今後も新しいメンバーを加え、意見交換会を継続する必要性のあることを痛感。また出席者からも同様の意見が述べられた。

# 第21回は、"絶景"と"絶品"のふるさと玄海町で

佐賀県 玄海町産業振興課主事

和田倉恵美

第20回を記念するとともに東北初開催となつた今回の棚田サミットに、私たち玄海町からも関係者を含め40名ほどが参加させていただきました。

山形県上山市の歴史ある温泉や食、人の温かさに触れたとともに、改めて中山間地域で生きることの苦労を知り、その美しさ・大きさを実感することができた第20回全国棚田（千枚田）サミットでした。

おもてなしいただいた山形県及び上山市の関係者の皆さんには心から感謝申し上げます。

さて、次回は佐賀県玄海町で棚田サミットを開催いたします。

玄海町は、佐賀県の北西部、玄界灘に面し、青い海と緑豊かな田園風景が美しい風光明媚な町です。

人口約6100人の小さな町ですが、第一次産業である農業・漁業・畜産業が盛んです。稻作のほか、みかんやいちご、玉ねぎ等の山の幸、鯛や牡蠣、干物等の海の幸に加え、佐賀牛も多く出荷されるなど、「絶品」の食が揃います。現在注目を集める「ふるさと応援寄付金」制度では、平成25年度の寄付申請額が3億円ほどにのぼり、そのお礼の品としても前述の特産品が全国に発送されています。

平地が少ない玄海町では、水田のほとんどが棚田です。急傾斜で小規模な棚田を代々守り継ぎ、暮らしが糧としてきました。中でも玄海町を代表するのが、「浜野浦の棚田」です。特に4月中旬～5月中旬の代かき・田植えの時期はオレンジ色の夕日が山間に沈み、海と水田と畦道が描く造形美は息をのむほどの「絶景」。平成11年の日本の棚田百選認定をきっかけに、多くのメディアに取り上げられ、全国からの訪問者も増えました。

第21回の棚田サミットは、平成27年10月23・24日に開催いたします。町民

一丸となり玄海町らしい開催ができるよう準備を進めているところです。「絶景」と「絶品」のふるさと玄海町で皆さまのお越しをお待ちしております。

浜野浦の棚田



溝上陽子さん  
(佐賀県玄海町在住)

次回のサミット開催地から「来年のために」と初めて参加しました。玄海町には平野がなく、田畠はすべて棚田です。昔の人たちが作り上げてきた田んぼ、維持管理がどれほど大変だろうと思いますが、私たちの原風景を残してほしいと思います。サミットに参加し、人生の先輩たちが、たくさん参加されていて、この方たちのおかげで棚田が守られていることを感じました。上山市のクアオルト、大蔵村四ヶ村地区の取り組み、新鮮で参考になりました。ありがとうございました。ありがとうございました。



## 参加者の声

今回兵庫県から棚田サミットに参加させていただきました。6回目の参加で、いつも参加者や地域の方々との交流、情報交換を楽しめています。今回の棚田の見学を通じて、改めて地域の方々の今までの努力を強く感じることができました。なめこ汁、こんにゃく、りんごとてもおいしかったです。

将来棚田サミットが兵庫県で開催できるように夢を描いて実践していきます。よろしくお願ひいたします。

永菅裕一さん

本協議会個人正会員  
(NPO棚田LOVER's理事長)  
兵庫県市川町在住



7 The terraced of rice field news

### 棚田に学ぶ

上山市の山間部、限界集落といわれる地区で、蔵王を望みながら田畠を耕している私は、棚田サミット、特に基調講演にとても興味を持って、仲間と参加しました。

結城先生は、心にしみいるやさしい口調で、「たった茶碗一杯のコメにしかならない小さな田んぼでも、中山間の農業者(百姓)は一所懸命コメを育てます。その中山間地での農業の大変さや管理の苦しさは、コメの一粒、一粒に宿り喜びへと変わります」と話されました。その通りだと思いました。そして、地域の仲間とコメをつくる楽しい農業が希望を与えてくれるのだと、農業を守ろうとする全国の皆さんイベントや試みの話にとても感動しました。



平吹 崑さん  
(山形県上山市在住)

### 棚田保存会意見交換会は継続して下さい

美しい棚田に魅せられて今年も千枚田サミットに参加した。あの人と会えるから、みんなと会えるから……何よりあなたが元気で良かった。そう言葉をかけられてとてもうれしかった。棚田保存会意見交換会は、今年は変わった趣向で面白かった。思わぬ成り行きで結論を見いだせた。

棚田保全の課題はどこも同じだと思いますが、今を頑張らなくては後継者は見つかりません。毎年サミットには参加していますが、今年もまた、棚田保全活動の力に充電させてもらいました。スタッフの皆様に感謝です。

渡辺すみ子さん

(長野県千曲市 姨捨棚田名月会)



## 山形での棚田サミットを想う

山形・しかも私の在住地である上山で開かれた「棚田サミット」が第20回目だと聞きその歴史の長さと短さが私の頭を交錯している。

三年前になるが、徳島県でそれがおこなわれた時にはゼミナールには参加した。

実は開催地である上勝町は私の居住地である狸森よりもさらに耕地の立地条件に恵まれないところだ。そこで八十歳になつても元気で木の葉を採つてそれを売り、稼いでいる人たちが多いと教えてくれた人がいたので、サミットの前日に行われるゼミナールの方が現地をこまかく見ることができると思つてそのようにしたのだつ

た。ところが幸いにというべきか否か、ゼミに参加したのは私と妻の二人だけだつた。

このたびは在住地である上山で行われるとなつては参加せずにおれない。しかも「中山間集落協定」の役員七名全員が参加するといった意気込みだったので私を強く励む気持ちにさせてくれた。

サミットには九州や四国などの遠方からも来られ、盛大であり賑やかであり、真剣であつた。その人たちの姿を見て私は、これを都会にいる多くの人たちに見せてやりたい、というのが第一の印象だつた。

棚田の現地見学は三方面にわかれたが、私は最寄りの小倉の棚田に赴いた。そこでひそかながらに恥らしきものが現地を見たがそこには穀の穂



農民作家（山形県上山市在住）  
佐藤藤三郎

はたわわですごく美しかった記憶が残っていたからである。

季節が過ぎていたのでやむを得ないことが、ほんとにあのときの光景を参加者に見せてやれなのが悔しかつた。加えて寂しく思つたのは基盤整備が行われている田んぼに稻ではなしに啓翁桜が多く植えられていることだつた。そして「この木はなんですか」といつた幾人かの人の間に自信を持つて

説明できなかつたことが心に痛く刻まれている。

けれど翌日の分科会で私は「棚田米（に限らず）の需要を伸ばすのには子どものおやつに味噌を塗つたおにぎりをたべさせることだ」といい「そのような家庭づくりをしなければ棚田の村は残せない」と発言したとき大きな拍手があつたことの嬉しさだつた。

私は「棚田と人の暮らし」を密に繋ぐことによつてこそそれが生かせる。いや「生きるもの」と考へている。難しい現実ではあるが、それをしないで棚田は甦ることがない、というのが私の持論だ。

## 山形の棚田を想う

写真家（山形県河北町出身）

青柳健二

今から10数年前に棚田百選を撮影しながら日本各地を周つて、最後山形県に入ったとき驚いた。こんなにも美しい棚田があったのかと。山形を「生ま





山形県朝日町楢平

秋の田んぼの匂いを嗅いで、ある記憶がよみがえった。それは3歳半のときのものだ。どうして「3歳半」と正確にわかるのか。

私の実家も昔は兼業農家で、秋になると、裸電球に照らされた室内は、稻杭から外したばかりの稻束が天井まで積み上げられて、脱穀機の音がずっと聞こえていた。

そんな中で「生まれた！」という声がした。私がその声に導かれるように奥の部屋へ入ろうとしたら大人たちから「入っちゃダメだ」と止められた。あとでわかつたが、3歳半離れた妹がそのとき生まれたのだった。



山形県大蔵村四ヶ村  
棚田写真撮影：青柳健二

れ故郷ではなく「旅先」という客観的な目で見ることができたからではないかと思う。その後何度も山形に出かけた。大学を卒業後私は山形を離れた。東京でアルバイトをしながら、旅をして写真を撮る生活を選択した。内心は田舎から離れたいということもあった。個人的な理由ともいえるが、田舎は遅れて何もないところという当時の風潮に流れられたということでもあった。

こうして私は遅ればせながら山形を「再発見」したのだ。心の奥深いところにしまわれてあつた記憶が、突然目前で息を吹き返し、活動を始めたようだつた。東北独特の「稻杭」が立ち並ぶ棚田、黄色になつた棚田が生き生きとして見えてきた。

秋の田んぼの匂いを嗅いで、ある記憶がよみがえった。それは3歳半のときのものだ。どうして「3歳半」と正確にわかるのか。

私の実家も昔は兼業農家で、秋になると、裸電球に照らされた室内は、稻杭から外したばかりの稻束が天井まで積み上げられて、脱穀機の音がずっと聞こえていた。

そんな中で「生まれた！」といふ声がした。私がその声に導かれるように奥の部屋へ入ろうとしたら大人たちから「入っちゃダメだ」と止められた。あとでわかつたが、3歳半離れた妹がそのとき生まれたのだった。

# やまがたの棚田20選

山形県が平成20年2月に認定した「やまがたの棚田20選」。棚田の魅力を再認識し、棚田をはじめとした農地を付加価値のある資源として磨き上げ、次世代へと継承していく取り組みです。各地域には、棚田だけでなく、伝統文化や豊かな生態系、景観や食、人々と一緒に育んできた人々の暮らしがあり、それらが棚田の魅力となっています。

## 蔵王山田

(山形市蔵王山田)



昔から水神として崇められてきた蔵王連峰瀧山(りゅうざん)のふもとにある棚田。湧水が豊富でホタルも多く、「ほたるの里」として都市住民との交流や、地元小学生との環境美化活動も行われている。近くには市営キャンプ場や公園もある。

## 樹

## 平

(朝日町三中)



日本の棚田百選の一つ。棚田に隣接する小高い一本松農村公園からの眺望がおすすめ。約200枚の棚田を守ろうと平成18年から棚田保全隊員を募集している。保全隊員は活動に応じ、地域農産物と交換可能な棚田チケットをもらえる仕組みだ。

## 中

## 沢

(村山市たも山)



村山市北部、鶴岳(こしきだけ)のふもとにある中沢集落。集落有志で結成した「中沢棚田保全会田んぼボーアイズ」が保全活動を行う。有機栽培棚田米を東京浅草寺で出張販売も。集落内の直売所でのイベントや「原本なめこ祭り」でも交流が進んでいる。

## 小倉

(上山市小倉)



ミズバショウの群生地として名高い鳴谷地沼(しげのやちぬま)を水源とするため、清らかな水が用水路に流れ、時にはイワナも泳ぐほど。平成22年、約26haのほ場整備を機にイワナ水路やお花街道も整備されており、一般の人も散策を楽しめる。



「やまがたの棚田20選」認定地区には、写真のような標柱が建つ

## 高

## 橋

(尾花沢市高橋)



尾花沢市街地より東北東へ約10km。宮城県境にある靈峰翁山の清流で棚田米が育つ。平成24年には、棚田が一望できる御嶽神社まで地元住民が遊歩道を整備し、桜の苗木も90本植えた。小学校と連携しての「ちびっこ農場」も行われている。

## 田麦野

(天童市田麦野)



晴れた日には棚田から靈峰月山の姿も眺められるロケーションが自慢。天童市街地から車で約15分の山間地である。地元酒米でできた純米吟醸「たむぎの」や東北芸術工科大学の学生らとのコラボによるキャンドルアートイベントも好評だ。

## 蔵王上野

(山形市蔵王上野)



県道21号線を蔵王温泉方面に進み、蔵王山神社の大鳥居の先に広がる棚田である。棚田からは市街地(山形市・上山市)が一望でき、山側は蔵王連峰というビューポイント。毎年夏開催の「うわの流しそうめん祭り」が人気。1000人以上の来場者で賑わう。

## 明光寺

(尾花沢市中島)



戦国時代には2千人規模の村があり、棚田はその頃から続くといふ。湧水が多く、かつては眩しいほどのホタルが乱舞していたとか。中島集落ではホタルを呼び戻す活動のほか、住民手作りで棚田を灯す「ほんぱり祭り」も開催している。

## 大蕨

(山辺町大蕨)



棚田に並ぶ杭掛け光景が見事で、日本の棚田百選にも認定されている。だが、荒廃が進み、保全活動を行う「中地区有志の会」や「グループ農夫の会」が発足。プロサッカーチーム・モンテディオ山形の選手たちも参加し、保全活動を盛り上げている。

## 蔵王駒鳴

(山形市堀田)



整形されていない不揃いな棚田が並んでいるのが特徴。冬期間も棚田に水を張り、飛来してくるカモなどの野鳥保護に努めている。蔵王温泉へ向かう県道21号蔵王公園線から農道へ入り、杉林を抜けた先に広がっている。天気が良い日には朝日連峰も。

おお  
**大**  
あみ  
**網**  
(鶴岡市大網)



靈峰月山の西側山麓に位置する大網地区は豪雪地帯である。豊富な水で育つ棚田米を平成25年から「大網の棚田米」として販売している。大網の棚田を縦断する「六十里越街道」は約1200年前、庄内と県内陸部を結ぶため開かれたといふ。

こくぞうやま  
**虚空蔵山**  
(川西町時田)



JR米坂線中郡駅を降り、目の前に見える小高い山が虚空蔵山である。ここにはウォーキングコースも整備され人々の交流の場でもある。環境に配慮したバンブー(竹)舗装農道があり、その先の展望台からは屋敷林に囲まれた家々の景観も楽しめる。

おお  
**大**  
うら  
**浦**  
(大石田町大浦)



平成9年、大石田町が町登録文化財に指定した大浦の棚田。大浦の棚田を見下ろす大浦小坂からの眺望は、町3大ビューポイントの一つである。そのほか、最上川の舟運で栄えた大石田町には、松尾芭蕉や正岡子規、斎藤茂吉の歌碑などが建つ。

くれ  
**暮**  
つぼ  
**坪**  
(鶴岡市温海)



県内で唯一、海を見下ろせる棚田、として知られている暮坪の棚田。地元子供会が農業体験を行ったり、写真愛好家やトレッキングを楽しむ人たちで賑わっている。展望台からは、日本海と棚田を眺めることができる。

なか  
**中**  
やま  
**山**

(白鷹町中山)



白鷹山のふもと、なだらかな傾斜地に広がる中山地区。茅葺屋根の民家もあり、美しい棚田集落の景観を残している。地区内にある町営スキー場には、地区のお母さんによる地元食材を使った手料理の店「まあ・どんなレストラン」もある。

し  
**四**  
か  
**ケ**  
むら  
**村**

(大蔵村南山)



日本の棚田百選認定を機に平成14年から地域有志で保全を開始した。平成16年夏からは棚田のあぜにロウソクの灯りを並べる「ほたる火まつり」を開催。現在は、オカリナ演奏も楽しむ「ほたる火コンサート」へと発展し、来場者は1000人を超える。

こえ  
**越**  
さわ  
**沢**  
(鶴岡市越沢)



標高約350m、豊富な湧水が水源の50haの棚田である。この湧水、朝日連峰摩耶山(まやさん)から湧く銘水「郷清水」として名高い。その水で育った「はえぬき」は日本酒「摩耶山」になり、また地元運営のそば処では、地元産十割そばが出される。

み  
**深**  
やま  
**山**

(白鷹町深山)



朝日連峰の山裾にある深山地区。集落全戸加入の「いきいき深山郷づくり推進協議会」では自然や景観、伝統を生かし、暮らしの価値を高める活動を行う。県指定無形文化財「深山和紙」の保存や地区運営の農家民宿「のどか村」も人気だ。

かた  
**片**  
くら  
**倉**

(戸沢村角川)



ひっそりとした山あいの片倉集落は、3世帯のみが暮らしている。他地区に移住した人も含め、12名で耕作。平成13年に、地元で砂防ダム建設の際に「人面石」が発掘され、集落内に祀られている。近くの与吾屋敷地区でも棚田が耕作されている。

だい  
**たらのき代**  
(鶴岡市たらのき代)



たらのき代の棚田がある櫛引地域は、東に靈峰月山、西に朝日連峰が望める場所。県内でも果樹生産が盛んな「フルーツ王国」で収穫体験なども人気だ。庄内平野を見渡せる棚田からの眺望は格別である。晴れた日には鳥海山も見られる。

け  
**毛**  
げ  
**下**  
の  
**野**

(飯豊町高峰)



置賜白川にある白川ダムから5kmほど下った毛下野集落。毛下野の棚田は昭和45年に開田されたもの。棚田の中には古い山の神が今も祀られ、農道では花の植栽も進む。そばも作られ、近くの手打ちそば「高峰工房」では体験も可能である。

かい  
**海**  
しょう  
**上**

(高畠町上和田)



平成25年に地区を一望する展望台が整備された。さらに、一念峯の頂上へ奇岩をめぐりながら20分ほど登山道を上れば、四方が眺望できる。集落内には水仙を植えたスイセンロードも整備。平成25年秋には「海上棚田米」の販売をはじめている。

# 月山と湯治と棚田と 山形県大蔵村

1500人の集客力、四ヶ村  
棚田「ほたる火コンサート」

白装束の男たちが松明を掲げ、  
棚田の中を歩く――。

そんな荘厳な光景を見ることが  
できるのは、靈峰月山の麓にある  
山形県大蔵村・四ヶ村の棚田だけ  
かも知れない。

8月第1土曜、夏の宵。四ヶ村地区(\*1)の棚田で開催される「ほたる火コンサート」の点火式の光景だ。たった一晩で約1500人が集まる。この季節、人口約3700人の大蔵村で最多の集客力を誇るイベントだ。この「ほたる火」を灯しに、白装束を纏った行者姿の男たちが、山一つ向こうの肘折温泉郷からやってくる。法螺

ほたる火コンサートのようす。点火式では肘折温泉郷から開湯の火が届けられ、地元の子どもたちが参加する。写真提供：大蔵村

貝を鳴らし、「肘折開湯の火」を持つ。

その火は、地元小学生へと渡され、子どもたちは棚田の中の1200本のロウソクを灯すため、棚田の中へと散っていく。そうして

辺りを暗闇が包む頃、オカリナのコンサートはフィナーレを迎える。

「はじまりは平成16年です。四ヶ村地区は96戸350人。1人1本、全部で350本のロウソクを灯そ

うとはじめたんです。ただ地元で楽しむためだけにね」

四ヶ村棚田ほたる火コンサート実行委員会会長の中島敏幸さんが笑顔で語る。そもそも活動の発端は平成11年、日本の棚田百選に認定されたことだったという。「それまでは棚田といえば、たいへんに厄介者だったわけです。それが百選になり、全国棚田サミットやほかの地域へ視察に行きました。たいへん勉強になりましたよ。棚田は、米だけじゃなくて多面的機能もあり、国土も守る。また、観光にも役割を果たすことがわかつてき、ここでも体験ツアーの受け入れや耕作できない棚田にヒマワリやコスモスを植えたり、保全の取り組みをはじめたわけなんです」

その一つが「ほたる火」を棚田に灯すイベントだった。かつて乱舞していたホタルをイメージし、棚田の灯に込められた。

「肘折開湯の火」と呼ばれる炎がある。それは肘折温泉郷の伝統行事「開湯祭」の中に登場する。肘折集落は、月山への登拝口があり、

ツトボトルを針金でぶら下げ、それをあぜに立てる。ペットボトルの中にはロウソクが1本。風でペ

ットボトルが揺れ、まるでホタルのようにふわふわと明かりが揺れる。

会場の中心は、日本の棚田百選認定エリアの12・5ha。四ヶ村地区に広がる棚田約120haの中で

も切り立つ崖が、まるで屏風のように棚田に迫る場所である。このダイナミックなロケーションが功を奏した。

「2年目の平成17年に仙台から来られた方が、持参していた横笛を吹いてもいいですか」とおっしゃられて、自然とその場で笛の演奏をされたんですよ。あとで『笛の音が聞こえて、すごく良かつた』という声がありましたね。そこで第3回目からは、オカリナの演奏者を招いてコンサートを行うようになりました。向かいの崖が音になつたんです。向かいの崖が影響効果も良くしてくれて、いいんですよ」

そして4回目の平成19年は、先述した肘折温泉郷の開湯1200年にあたった。村も協力して、肘折集落と四ヶ村地区をつなぐストリーリーが「ほたる火コンサート」の灯に込められた。

だ。開湯の日とされる7月14日、白装束の行者の出で立ちをした男たちがお湯の神さまに感謝し、儀礼を行う。前夜には火が奉納され、その火は温泉街一帯に運ばれ、かがり火となる。それが「肘折開湯の火」である。

その火が、8月第1土曜の夜だけは一つ山を越え、隣の四ヶ村地区へ渡り、「ほたる火」となる。

そして、「ほたる火コンサート」を照らすロウソクの数も350本から開湯1200年にちなんで1200本へと増えた。肘折温泉郷について、もう少し話を続けよう。

大蔵村の中心部は最上川が流れ、その舟運で栄えてきた。最上川周辺がなだらかな平坦地の広がりを見せるのに対し、肘折温泉や四ヶ村地区へ向かう道は徐々に険しくなり、いつしかすっぽりと深い山の中に入つていく。

大蔵村時代に源氏ゆかりの豪武者が開いたといいう。棚田開田の記録は残されていないが、「山落ち」と地元で呼ばれる地滑り地帶で、地滑り跡を生かしながら、また地滑りによる田畠の崩壊も乗り越え、今日へとつなげられてきた棚田である。

(\*1) : 四ヶ村地区は、4集落をまとめた呼称。鎌倉時代に源氏ゆかりの豪武者が開いたといいう。棚田開田の記録は残されていないが、「山落ち」と地元で呼ばれる地滑り地帶で、地滑り跡を生かしながら、また地滑りによる田畠の崩壊も乗り越え、今日へとつなげられてきた棚田である。



蓮を植えたビオトープ。花が終わっても風情があった。「耕作していない田んぼをビオトープにして蓮を植えてみたら、きれいだと評判が良くてね。水生昆虫も20種類以上います」と中島さん



写真上が中島俊幸さん。セリ収穫中の長沼正一さんに会う。「ここはみんなでやらねばといふ気持ちが強い。草刈りもみんなでやる。誰かがやるとしきゃ斉にやってるよ。だから、ほたる火祭りもできる。この棚田が百選になつて誇りだ」と話す

四ヶ村棚田の標高は約250m。写真は「ほたる火コンサート」会場になっている、日本の棚田百選認定エリア。切り立つ崖がまるで屏風のように、棚田と向き合う。秋は崖の紅葉が見事。この崖を背にコンサートが行われる

**肘折温泉郷は、山々に囲まれた直徑約2kmの凹地（カルデラ）にある。肘折集落は現在、約100戸。温泉旅館は23軒、温泉街には共同湯のほか、商店なども並び、約300人が暮らしている。**  
**かつては月山への登拝者がここに宿泊して山頂を目指した。夏には登拝する白装束の人々の行列が月山まで続いたという。最盛期は江戸中期。1709（宝永6）年の記録には、6月14～27日の2週間で肘折口からの登拝者数は1万2115人となる。なんと1日で千人を超える人たちがここから登っている。ちなみにこのルート、途中念仏ヶ原避難小屋に泊まり、2日間必要だとか。それでも東から登ると縁起が良いと今も登山者が絶えることはない。**

そんな肘折温泉は、明治半ばには湯治場として発展していく。農家の人たちが農閑期に1～2週間滞在するスタイルになつていった。最近は長期滞在者は減つたといふものの、宿で一緒にになった年配の女性客は、「今回は5泊6日」とのことだった。県内天童市からいつも新幹線で来るのである。

「天童にもいい温泉はあるでしょうに、どうしてここに？」  
 「んだ。あるけど、自分にあつたお湯ゆうのがある。ここのは合う。肘折はいい」

また、米沢市から来ていた老女も毎秋に訪れると言ふ。今年は短めで3泊のみだと話していた。

とはいへ、時代は移り変わり、確実に観光の色合いが濃くなつて

いる。6月14～27日の2週間で肘折温泉を堪能してもらうためにも、レトロな温泉街や伝統行事といつた魅力のほかに、周辺のトレッキングや体験などのプランが重要な要素となっている。

温泉街を歩くと、掲示板に貼られた「ツアーケース」の情報が目に付いた。「棚田・ブナ林巡り（ガイド付き）」の文字が大きく目立つ。棚田巡りが、旅の中に組み込まれてきているのが実感できた。

ほたる火コンサートの夜も、肘折温泉からマイクロバス2台で130人の宿泊客が棚田へやつてくれる。個人の自家用車利用も考え方ではないかとのことだった。

四ヶ村地区と肘折温泉。今まで2つの地区は車で数分の場所になつたが、かつては山越えを必要としたトンネルが抜け、道路が整い、そらく四ヶ村地区は純然たる農山村であり、肘折集落は温泉街と、かつてはその先に銅山もあり、商業エリアだった。交流が盛んだつたわけではない。だが、かねてから四ヶ村地区は、肘折温泉の湯治文化を支えてきていた。

現在、朝市は地元商店のほか、10軒の露店が旅館の軒先に並ぶ。肘折の人の出店はそのうち1軒だけ、10軒余が四ヶ村地区からだと聞いた。これは、車がなかつた時代からずっと統いているそうだ。

朝市は、4月末～9月（毎朝5：30～7：30）10月～11月下旬（毎朝6：00～7：30）開催

## 古くからの「朝市」でのつながりと新たなるつながり

長期の湯治に欠かせないのが自炊だ。「自炊するから安く泊まれる」のだという。そのための食材調達の場。それが肘折名物の朝市だ。

「6時からはじまりますよ。一番盛り上がるるのは6時半です」

宿でそう案内された。取材した早朝、あいにくの雨。6時半に表に出ると、すでにどこから人が湧いていたかと思うほど、浴衣姿の人々が行き交っていた。温泉街の両脇は、路線バス1台が通行可能な程度、道が空けられ、露店が並ぶ。

秋はキノコ三昧。巨大なマスダケやミキタケ、ブナハリタケなど珍しいキノコのほか、ナメコやシイタケなども山盛り。春から初夏は山菜。そのほか里芋や大根など、野菜もすらり。「しそ巻き（米粉餅）」と呼ばれる餅米のちまきもぎゅうすり（山芋）をまぶして食べる人気の味だ。漬け物も多かった。芋がらの酢漬けにからし菜、たくわん。カブやキユウリ、ナスの粕漬け……。海の幸もあった。スジコ、タラコ、塩くじらなど、ちょっと贅沢な感じである。人々は列をなして買っていた。

現在、朝市は地元商店のほか、10軒の露店が旅館の軒先に並ぶ。肘折の人の出店はそのうち1軒だけ、10軒余が四ヶ村地区からだと聞いた。これは、車がなかつた時代からずっと統いているそうだ。

きたのである。中島さんは言ふ。「今後、四ヶ村と肘折の交流はさらに進もうとしていますよ。四ヶ村では地鶏を育てていますから、この地鶏を肘折の旅館で使つてもう計画もあるんです」



肘折温泉の朝市の光景から。写真左下は、昭和12年頃築造の旧肘折郵便局舎。朝市の時間は簡易カフェになっていて、紳士お姫さんとの会話を楽しめた

朝市は、4月末～9月（毎朝5：30～7：30）10月～11月下旬（毎朝6：00～7：30）開催

ここは積雪3～4mといへんで、ハウスも建てられないからお米中心の地域。だけど、面白いこと、楽しいことがあれば、帰つてくる人たちも出てくると思うんです。そのためにも棚田をもっと生かしたいですね。棚田が持つていて魅力はまだありますから」

棚田（農村空間）と温泉。山を隔てた異色の2地区が、互いの個性と魅力を最大限に生かすことでの存在価値を高めあう。そんな新たな観光空間の創出がはじまつていた。

# 全国棚田サミット開催から1年

くまもる心が育む豊かな恵み

棚田・段々畑の未来を見つめて

平成26年11月15日(土)～16日(日)、和歌山県有田川町で「第1回わかやまの棚田・段々畑サミット」(主催：和歌山県棚田等保全連絡協議会)が開催された。参加者は県外からも多く、総勢349人。第19回の全国棚田(千枚田)サミットから1年、「和歌山県版棚田サミット」として次の幕が開いた。

このサミットの立役者である和歌山県農業農村整備課王幹、岡村成実さんは語る。「全国棚田サミットは、いわば打ち上げ花火のようなもの。どーんと打ち上げて終わるのではなく、線香花火のように息の長いものにしたいんです。それが県版棚田サミットです」

2日間のプログラムでは、現地見学(有田川町沼谷地区)、基調講演、事例発表(石川県輪島市・橋本市柱本地区・沼谷地区)、パネルディスカッションが行われた。現地見学は、全国棚田サミットのとき、集落自ら「自分

のところにも見学会に来てほしい」と名乗りをあげたが、実現できなかつたという有田川町沼谷地区。26世帯48人。うち独り暮らしは13人。高齢化率79%という地区だ。「なんとかしようら わがらでしようら」。これがこの地区的ギャッチフレーズである。集落を出た人たちも帰ってきて、和歌山大学生の協力も得て、みんなが笑顔を満開に咲かせてのお出迎え。つきたての餅をはじめ、自家製のお茶4種を用意してくれた。集落の人たちの笑顔が幸せ感に溢れ、その霧雨気のあたたかいこと。交流を進めいく際、何より地域の霧雨気が重要であることに改めて気づかされた見学会であった。

鳥取から1人で参加していた女子大学生は「山形での全国サミットにも行きたかったけれど、東北にはなかなか行けなくて。出身が大阪なので和歌山だつたら行ける!しかしも第1回目!と思って、いろんな人と話ができる参加して良かったです」と話していた。

また特筆すべきことは、サミットに合わせ、「わかやまの美しい棚田・段々畑」の認定授与式が同時に行われたことである。平成26年の認定は5カ所。

「うちの県は保全活動はこれからといつてもらいたい。だから毎年認定していくんです。認定を取り消す場合もあるとしています」(岡村さん)。第2回目は、認定を受けた那智勝浦町での開催が決定した。線香花火は確実に燃え続け、次へとバトンをつないでいる。和歌山県の今後の展開に注目あれ。

(石井里津子記)

## わかやまの美しい棚田・段々畑(平成26年認定地区)紹介

### 芋谷の棚田



所在地：橋本市 620a  
保全団体：柱本田園自然環境保全会  
450年以上前の室町時代に開拓されたという芋谷の棚田。芋谷川一帯の環境保全のほか、里山ウォーキングなど交流も進む。

### 山田原の段々畑



所在地：有田市 1600a  
保全団体：山田原集落  
石積みの段々畑が見事な有田市山間部。山田原では平均勾配が約28度の急傾斜で有田みかんが育つ。「みかんの花街道ウォーク」の散策コースにもなっている。

### あらぎ島(棚田)



所在地：有田川町 230a  
保全団体：あらぎ島景観保全保存会  
国の重要文化的景観に選定。江戸時代に舌状の河岸段丘を開墾。田植え・稻刈り体験、稻作学習、キャンドルライトイルミネーションも。

### 龍神村下廣井原の棚田



所在地：田辺市400a  
保全団体：仮屋集落  
日高川沿いにあり、ヤーコン栽培に取り組む。「健康的むら龍神」プロジェクトでヤーコンを活用した小学生の農業体験や学校給食への提供も行っている。

### 小阪の棚田



所在地：那智勝浦町 169a  
保全団体：棚田を守ろう会  
小阪集落住民と1ターン者で組織する棚田を守ろう会が30年放棄された棚田を復元。都市住民との交流も盛ん。定住促進活動も積極的に取り組んでいる。

## 会員募集中

### 新しく会員になったみなさま

- <自治体正会員>山形県大蔵村
- <団体正会員>大分県別府大学夢米棚田チーム
- <個人正会員>西口 和雄(岡山県)
- <個人賛助会員>森元サカエ(和歌山県)

## 棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織 全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局  
有田川町役場 清水行政局 産業振興室内

〒643-0521 和歌山県有田郡有田川町清水387-1

TEL:0737-52-1111(代)

FAX:0737-25-9005(直)

協議会 HP:<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

## 編集後記

第20回全国棚田サミットでは、山形県上山市のみなさま、ありがとうございました。東北初の全国棚田サミットで、ライステラスでも東北(山形)の魅力をぎゅっと詰め込んだ特集を組んでみました。年2回の発行ですが、エコプロダクツ出展など旬の話題を入れての1月発行号です。春に向けて、来年度の計画をみなさまも考えられている頃ではないでしょうか。一方で、長野の地震、また大雪による孤立化など災害も立て続けに起こっています。みなさまどうぞ、気をつけてお過ごしください。積雪地帯の方々は雪下ろしなどくれぐれもお気をつけ下さい。 石井里津子

全国棚田(千枚田)連絡協議会として

# エコプロダクツ2014に出演

国内最大級の環境展示会

平成26年度全国棚田(千枚田)連絡協議会事務局  
和歌山県有田川町清水行政局産業振興室

中谷芳尚

平成26年12月11～13日、東京有明「東京ビックサイト」で開催された「エコプロダクツ2014」に、NPO棚田ネットワークにお手伝い頂き、当協議会として初めて出展をしました。

当協議会加盟の棚田保全団体など全国より12の団体と棚田ネットワーク、当協議会の14団体で出展しました。イベント期間中の3日間は、多くの来場者(主催者発表で16万人)で賑わいました。各ブースでは、棚田で収穫された天日干しの棚田米や、地元特産品のPR・販売などの他、日替わりミニステージでは、各団体ごとに思考を凝らし、来場者と共に地元のお寿司づくりを体験してもらったり、ご当地のゆるきゃらも登場し、大いに盛り上がりました。

初日最後のミニステージでは、事務局として、当協議会の活動概要などを簡単にですが、ご紹介させて頂きました。その様子が動画サイト「YouTube」で「全国棚田協議会」と検索頂ければ、ご覧頂けます。是非ご覧下さい。

右：ミニステージで  
全国棚田(千枚田)連  
絡協議会のアピール  
もしました

12団体を全国地図に  
マークして紹介

たくさんの来場者の  
応対に追われた3日間

国際化・多文化化の進展とともに、農業の持続可能な発展をめざす取り組みが注目されています。そこで、本年第21回全国棚田(千枚田)サミットは、「未だ見ぬ世界へ」をテーマとし、初の東北・山形県上山市で10月23・24日の日程で開催されました。サミット期間中は、当協議会会員はもとより、全国各地から抱く多くの皆さまのご参加により、盛会の内に終了することができました。これもひとえに、横戸市長をはじめ上山市実行委員会や地元関係機関・団体の皆さまのご尽力の賜物であり、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

さて、当協議会では、サミット前日夕方、本年度第1回の理事会、翌23日サミット開会前の午前中、総会を開催し、前年度の事業経過報告並びに収支決算報告、本年度の事業計画並びに収支予算について可決承認をいたしました。

また、次年度以降のサミット開催地につきましては、平成27年第21回開催地・佐賀県玄海町、第22回開催地・新潟県佐渡市に続き、第23回サミット開催地は、昨年7月、サミット開催に向けた請願書が提出された、長崎県



事務局、和歌山県有田川町から  
のお知らせ

波佐見町に正式決定されました。総会不参加の会員の皆さまには、総会資料をお送りしております。ませんので、必要な方は、本年度事務局までご連絡ください。本年第21回全国棚田(千枚田)サミットは、「共につなげよう未来へつなぐ」をテーマに10月23日(金)から24日(土)の日程で、ふるさと納税全国有数の町、佐賀県玄海町で開催されます。会員の皆さま、今後とも当協議会の運営により一層のご理解・ご協力を宜しくお願い致します。

## ●事務局ニュース●

また一方で、いくつかの中山間地域が災害に舞われるというたいへんな冬を迎えています。11月22日の「長野県神城断層地震」では、本協議会会員である長野県小谷村でも被害は甚大で100世帯以上が避難を余儀なくされました。12月に入つてからは徳島県三好市、新潟県津南町などでも大雪による災害や山間集落の孤立が各地で起こっています。被害に遭われました皆さんにお見舞いを申し上げますとともに、1日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。



### 五十嵐瑛子さん

(青森県 黒石市農林課農地林務係 技師)

このたび、初めて棚田サミットへ参加させていただきました。中山間地における水田の環境づくりとして水路等の整備をしており、人に限らず棚田周辺に生息する生物にとっても良い環境をつくり出していると感じました。

また、棚田に限らず、さまざまな環境における農地全体の現状や課題を訴える場面が多くあり、講演する人々は皆、担い手不足や農業従事者の高齢化を主張しこれらは深刻な問題であると改めて実感いたしました。



女性たちが、地元のりんご(シナノスイート)を出してくれた。笑顔ですすぐれてくれるものだから、美味しいと相まって、たくさんいただきました。朝日町にて



おもてなしは玉こんにゃく。味がしみいで、からだいいぱいに美味しいも染みこんで……。朝日町にて



朝日町楓平では、展望台になっている小高い一本松公園へ上がった。その坂道に、木材チップが一面敷き詰められていた。雨上がりだったサミット開催日、地元の方が、参加者が足を滑らないようにと、自発的に前日、敷き詰めてくれたもの。感謝!

### 田中英人さん

(NPO福江島おんだけ振興会事務局長  
長崎県五島市在住)



お弁当は、事前に2種類から選択できた。1日目のお弁当。山形のおいしさがぎゅっと詰まっていた



長崎県の五島列島から参加しました。五島で大人から子どもまで幅広く体験活動を受け入れています。棚田サミットは、3回目の参加です。今回もいろいろな方にお会いして良かったです。分科会では岡山の英田上山棚田団の話を驚きました。すごい人たちがいるんだなあと。みなさんからの話を聞くと、五島での活動の刺激になります。まずは、地元でも話をしながらやれることから活動していきたいと思います。(談)



## 第20回 全国棚田サミット風景



閉会式にて。最後は、第21回全国棚田サミットの開催地である佐賀県玄海町のみなさんが次回をアピール。第21回は2015年10月23~24日の開催



見学会でバスを降りると、お茶を渡してくれました。朝日町にて



山辺町大蕨の棚田では、なめこの味噌汁のおもてなし。「寒いから、どうぞ」と差し出され、一杯の味噌汁に身も心もあたためられて、ほっと一息



山辺町大蕨の棚田では、サッカーJリーグのモンテディオ山形の協力を得て、選手たちが農作業したお米を「モンテ棚田米」として販売。会場の物販コーナーにて



11回目の参加です。20回目にして初めての東北開催となり、よく訪れる楓平、大蕨の棚田を紹介できたことを嬉しく思います。一本松公園でのリンゴとこんにゃくは美味しいかったですし、温泉も良かったです。分科会は棚田関係に拘らない人選など、新しい面も見られました。地元の方々の参加が少なかったこと、大好きなテーマソング「棚田へ行こう!」が聞けなかつたことが残念でした。次回の玄海町では棚田サミットらしい手作り感に期待しています。

### 村越康彦さん

本協議会個人賛助会員  
(棚田学会評議員 棚田ネットワーク会員  
宮城県仙台市在住)



長崎県長崎市(旧外海町)大中尾棚田保全組合のみなさん&長崎市スタッフの記念撮影。提供:長崎市、天羽紀絵さん。今回、サミット参加者でおそらく最高齢である、大中尾保全組合の広山昭作さんは84歳

東北は長崎からは遠かね。みんな10万円ばかり自分で出して来ましたよ。それだけ使って来たからには、もっと論議したかったねえ。次は隣の佐賀やね。その次は新潟県の佐渡ね。そりや、それまでがんばって行かんば!(談)



### 広山昭作さん

(長崎県長崎市 大中尾棚田保全組合)

写真協力: 上山市